

農協事業における農業支援サービス等の あり方検討会ヒアリング(R8.2.13)

～作業受託サービスの取組概要～

株式会社ジェイエイフーズみやざき

説明者 原料担当 伊豆元

会社概要および設立経緯



会社名	(株)ジェイエイフーズみやざき
資本金	100,000千円
会社設立	平成22年4月6日
操業開始	平成23年8月
事業年度	10～9月
売上高	約1,500百万円
事業内容	冷凍野菜の製造販売 自社農場運営 (約25ha)

メイン品目は『ほうれん草』全体の約7割

《会社設立の経緯》

- ・円高の影響等で量販店は輸入品中心
- ・残留農薬問題等による国産志向の高まり
- ・たばこ廃作や口蹄疫からの復興(飼料の作付も減少)のための露地野菜の振興

⇒ 『露地野菜の産地作り』と『冷凍加工』を組み合わせたモデル。先に工場を作り、周囲に機械収穫ほうれん草の産地を形成。

自社農場概要について

- 主力のほうれん草は年間約2,400 t (100~110ha)の原料が必要だが、生産者の高齢化等による契約面積の減少を補うため、6年程前に立ち上げ。
- 運営は原料課内の農場係 (日本人3名、外国人5名)
- ほうれん草栽培20~25haと、ほうれん草収穫受託作業 (年間1,000 t 以上) がメイン業務。
- 外国人従業員の作業前には機械の仕組み等を説明。オペレーターとしても貴重な戦力になっている。



ほうれん草栽培における分業化の仕組み



自社が受託
※一部再委託
(全員利用)

生産者が対応
(土作り+機械で
できない作業)



機械作業は
地域のJA出資法人へ
委託可能(7割利用)
※生産者は機械を
買う必要がない

- ・ 播種してから収穫までの期間は80～120日。
- ・ 作業全体の工程管理は、自社原料課社員の フィールドコーディネーター がおこなう。



ほうれんそう契約生産者について

- 契約生産者数は過去5年間で16名減少している。
⇒作業受託の取組を通じた面積減少の抑制や、新規推進も実施（現在生産者約50名、110ha）。
- 他の品目をメインで栽培しながら、遊休地の活用や水田裏作で、機械作業を委託しながら、圃場を有効活用する為に栽培されている生産者が多い。
- 30aを1～2圃場の小規模生産者から、4～5haの法人の方まで幅広い生産者に取組いただいている。



- 栽培開始前、収穫前、収穫終了後、各地区毎に生産者を含む関係者が集まり、意見交換を実施。
※課題や要望などを共有する。

自社農場での収穫作業受託について

- 以前は自社で収穫を受託できる体制がなく、JA出資法人等に作業を全て再委託していた。
- 委託先より人員やコストの問題で作業継続が難しいという話をいただき、自社農場の中で作業を請け負う体制を整えた（3年前より）。
- オペレーターのマルチスキル化や、中古機械の再利用等をしながら、作業の安定化と受託コストの抑制を図っている。



グループ内で使わなくなったローダーを修繕しながら使用。作業中に故障することもある。



オペレーターの都合がどうしてもつかない時、巡回途中のフィールドコーディネーターや、課長が収穫することもある。

自社農場の収支について

- 自社農場単体（ほうれんそう栽培、収穫作業受託）の収支は赤字。
- 栽培リスクがある時期（9月末播種や春作）は、自社が優先して作付を実施する。
- 生産者の圃場を優先して伸ばすため、自社が小さくても先に収穫する場合もあり。
- 冷凍野菜事業と合わせ会社全体で黒字を確保。



時間をかけて圃場の準備しても、1日の集中豪雨で全面積を蒔き直しに・・・。



生産者の圃場が伸びるのを待つため、物足りないサイズで先に収穫をすることも・・・。

赤字でも続けている理由

- 株式会社ではあるが『生産者のための組織』という考え方が根底にある。
- 効率が悪かったり、採算が取れない場合もあるが、生産者の所得向上や満足につながれば、それが翌期以降の作付意欲の向上や結果的に栽培面積の維持や工場の安定稼働にもつながる。



- 通常は機械収穫がメインだが、葉が寝ており機械だと収量が大きく低下しそうな生産者圃場では、採算度外視で手収穫を組み合わせる場面もあり。
※料金は機械収穫と変わらず。自社圃場の管理状況を見ながら柔軟に対応。

取組を継続していくための課題

- 従業員の確保（外国人人材無しでは、現在の取組は継続できないのが現状）。
- 機械の確保（収穫機等の導入コストが高く、回収を考えると簡単に導入ができない）。
- ドローン防除の体制整備や省人化技術導入。
- 生産者を巻き込んだ受託取組の拡大。
（どうすれば受託できるかを一緒に考える）



・押さえ部分の機械化で収穫の必要人数を2名削減(240万円/年)。



・遠方で収穫する際は、生産者の機械を借りて作業することもあり。(機械移動負担軽減)。

最後に

- 作業受託の仕組みを現状に応じてブラッシュアップしながら、これまで構築してきた地域の産地基盤を維持していきたい。
- 現在の取組は継続しながら農場部門単体でも黒字化が目指せるよう進めていきたい。

ご清聴ありがとうございました。

